

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	澤田 和輝
論文題目	畏敬の念が創造的思考に及ぼす影響		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>「畏敬の念」は雄大な自然などに包まれるなかで生じるとされる。その畏敬の念と創造性の関わりについて、本論文は、行動実験やオンライン調査にもとづく7つの認知心理学実験を行ったものである。</p> <p>第1章では、感情と創造的思考 (以下、創造性と記す) に関わる先行研究を概説した。とくに従来、感情の極性 (ポジティブ/ネガティブ) が創造性に及ぼす影響については知見が多く、ネガティブ感情は創造性を阻害することが広く知られている一方で、怒りなどの感情は創造性を促進するなどの知見も報じられていることを述べた。続いてこうした知見の錯綜を解消した動機づけ (接近/回避動機) モデルを紹介し、これを発展させた接近/回避動機づけと活性/不活性の2次元モデル (Baas et al., 2011) を概説したうえで、これらいずれの説明モデルも、主には基本感情に関わる知見を基に構築されたことに起因する限界点を指摘した。その上で、高次感情である畏敬の念に着眼することの意義とともに、その創造性へもたらす効果を解明することの必要性を述べた。</p> <p>第2章では、418名を対象に、二種の畏敬 (ポジティブな畏敬の念/脅威のある畏敬の念、以下 positive-awe/ thread-awe と記す) を条件とし、これらを喚起する映像の視聴は、とくに positive-awe は、すべてがお互いにつながっているような一体感をもたらすこと、その一方で thread-awe は息の詰まるような感覚をもたらすことを確認した。続いて48名の大学生を対象に、畏敬を喚起する映像の提示前後に規範逸脱行動を問うシナリオ課題を実施した。その結果、positive-awe 条件では規範意識の寛容方向への作用が確認されたのに対し、thread-awe 条件ではその変化が認められないことが確認されたことをふまえ、雄大な自然に接するなかで、寛容で柔軟な規範意識が醸成される可能性を示唆した。</p> <p>続く第3章では、33名の大学生を対象に、はじめに Navon 課題により知覚的注意を方向付け、畏敬関連の映像を提示した後に Flanker 課題を実施した。その結果、positive-awe 条件において接近動機づけが高まること、かつその動機づけの高さは Flanker 課題中の局所的注意の程度と正に相関することが示された。この結果を Baas et al. (2011) のモデルと関連付け、畏敬の念が創造性を促進するプロセスには知覚的注意が関与し</p>			

ない可能性を論じた。

第4章では、2つのオンライン実験（各々120名、130名が参加）を通して、自然界を源泉として喚起される畏敬の念は、自然への好奇心を高めること、かつ芸術作品により喚起された畏敬の念は芸術への好奇心を高めることを示した。これらの結果は、刺激の特性に応じて、畏敬の念は（領域普遍的にではなく）領域固有の好奇心を高めようことを示唆するものである。

続く第5章では、33名の大学生を対象に、絵画の鑑賞に続いて、そこから導かれる物語の創作を求めた。その結果、作品の意味を評価しつつ絵画を鑑賞すると、ここで生じる感動を介して、畏敬の念が物語の創作への触発を促すことが確認された一方で、こうした効果は作品の美しさや印象の評価を求めた条件においては確認されなかった。この結果をふまえ、既存のスキーマを更新するような鑑賞経験が感動を生み、創造的活動への触発が促進されるという過程を論じた。

第6章では、畏敬の念、知的好奇心、創造的自己効力感の各々の関連に着眼し、293名を対象として4カ月間隔の3時点による縦断的調査を行った。得られたデータについてランダム切片交差遅れモデルによる解析を行った結果、日常生活において畏敬の念を感じるほどに、次の時点の創造的自己効力感が高まること、個人内変動に着目すると、これら畏敬の念と創造的自己効力感との関連は好奇心により説明されないことなどを確認した。これらの結果は、知的好奇心以外に、畏敬の念が創造性を向上させる可能性を示唆するものとして解釈し、考察を展開した。

第7章では、総合考察として、研究全体のまとめと本研究の学術的および方法論的意義を述べた。主には感情の創造性への作用について、少数の次元（活性と動機づけ等）に集約して説明することの限界から、高次感情である畏敬の念を取り上げることの重要性を述べた。また、従来のモデル（Baas et al., 2011）をふまえ、特には接近的動機づけの作用は認知的柔軟性に加えて、その影響範囲を持続性にまで拡張したモデルを提唱した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、畏敬の念と創造性に関わる心理メカニズムについて多様な手法を駆使した7つの実験を実施し、得られた結果を心理学の構成概念や理論に対応づけ、個人差の観点から総合的に検討したものである。

本論文の特色は以下の3点である。

1. 畏敬の念と創造性の関わりの理解に、工夫に富んだ課題と多彩な指標により貢献している点
2. 心的情報処理の複数の階層から、畏敬の念のもたらす効果の個人差を新たに記述した点
3. そのもたらす効果について、感情や動機づけに関わる心理学の理論に位置づけ、縦断的調査の結果を包括して多面的に明らかにした点

第1章「序論」では、基本感情が創造性に及ぼす影響に関わる研究を展望し、感情や動機づけの観点から3つの説明モデルを概観した。これに続いて、正負の両感情の入り混じる高次感情に関わる研究知見をふまえ、感情が創造性にもたらす効果を解明するためには、高次感情である畏敬の念を視野に入れる必要性を述べた点に着眼の鋭さがある。

第2章では、自然界の映像から喚起される畏敬の念からもたらされる感覚が、畏敬の念の種別によって、万物との一体感あるいは息苦しさといったように異なること、ならびに **positive-awe** が喚起された後には、他者の規範逸脱行動に対する寛容性が向上することを明らかにした。この結果は、畏敬の念の中核にある心的現象の一つに、(創造性と関連する) 認知的柔軟性の促進がともなう可能性を示唆する点において注目に値する。

第3章では、知覚的注意に着眼し、先行する課題により方向付けられた知覚的注意が、**Flanker** 課題中の注意処理方略ならびに接近動機づけに及ぼす影響を検討した。その結果、**positive-awe** 条件において接近動機づけが高まるとともに、その動機づけの強さは局所的注意の程度と正に相関することが示された。これは高次感情である畏敬の念が、知覚的注意という、心的情報処理のごく初期の段階にまで影響しうることを実証した点で高く評価できる。

続く第4章では、畏敬の念と知的好奇心との関わりを検討した。オンライン実験の結果、畏敬の念の源泉となった刺激の特性(自然, 芸術作品)に応じ、それと同様のカテゴリーの知的好奇心が喚起されることを明らかにした。これは畏敬の念の機能

のみならず、好奇心のいかなる側面が高次感情の作用として促進されうるのかを多面的に考察するうえで、新たな視点を提供するものである。

第5章では、芸術作品の鑑賞、ここでは作品の意味や作者の意図を汲み取るプロセスがつづく創造的活動（物語の創作）に及ぼす影響を検討した。その結果、芸術作品の美しさや印象を評価すること以上に、作品の意味や作者の意図を推測することにより、ここで生じた畏敬の念は、創作に関わるインスピレーション（触発）と正に相関することを明らかにした。触発と（活動の）持続性との関わりをふまえると、この結果は、畏敬の念が創造的活動への持続的な取り組みを促進しうる可能性を示した点で注目に値する。

第6章では、これまでに検討した概念を包括して、縦断的調査により、畏敬の念、知的好奇心、創造的自己との関連を検討した。ランダム切片交差遅れモデルによる解析の結果、個人間変動と個人内変動の各々の観点から、日常生活において感じる畏敬の念と次の時点での創造的自己効力感の関わりとの相違を明らかにした。

第7章「総合考察」では、本研究の学術的意義とおよび方法論的意義を述べ、畏敬の念と創造性に関わる新たな仮説的モデルを提案し、残された課題と今後の研究方向を示した。以上のように本論文は、畏敬の念と創造性に関わる機能と構造を心的情報処理の階層性をふまえて検討すべく、論者は幅広い分野の研究成果と問題意識に基づいて、行動実験、質問紙調査、高度な心理統計解析の技法を駆使し、実験調査データを積み重ねて議論を構築した。

他方、今後に残された問題として以下の点が指摘された。

- (1) パフォーマンス評価による畏敬の念と創造性との関わりを検討
- (2) 畏敬の念と、物理空間的要因そのものが創造性へもたらす効果の相違の解明
- (3) 活性次元の線形性等をふまえた「活性・動機づけモデル」の精緻化

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって本研究は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和6年2月16日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。